１６３０年代の悲劇

１７世紀仏演劇研究会は、共通の研究課題として１６３０年代の悲劇を選び、その全容を解明することを目的として定期的な会合をもち、各自が分担した作品について報告し討議するという形式をとっている。このような過程から、個別作品に関する論稿が生みだされており、１９７７年秋に刊行した第１号には、橋本能、関谷苑子、皆吉郷平、野池恵子各氏による≪Hercule mourant≫ ≪Sophonisbe≫，≪Médée≫，≪Mariane≫ に関する論文が掲載された。本号では、会員四氏による≪Hippolyte≫，≪Marc－Antoine≫，≪Cléopâtre≫，≪Alcionée≫，≪Thyeste≫に関係する論文を収録することになった。

１６３０年代の悲劇を研究するという以上、各個別作品についてのモノグラフィーにのみとどまっていることはできないのであって、３０年代の悲劇全般にわたって包括的な研究に進まねばならないのは言うまでもない。残念ながら、いまだ全作品に目を通すことができないでいるなどの事情から、現状に甘んじている次第である。最近（１９８０年５月）、いくつかの作品を除いて、大多数の作品のマイクロフィルムが到着したので、これからはより発展的な研究の段階に進むことができるであろうと思われる。これからも鋭意努力し、第３号の結実をはかりたい。なお、巻末に、現存する１６３０年代の悲劇作品のリストを載せた。